「シンポジウム」日本文学 12

近代文学の成立期

出席者
越智治雄〈司会〉
平岡敏夫　前田愛
十川信介　浅井清
飛鳥井雅道　畑有三
竹盛天雄

發端

世界は廣し萬國はおほしといへど大凡、
五に分けし名目は「亞細亞」「阿非利加」「歐羅巴」、
北と南の「亞米利加」に堺かぎりて五大洲、大洋洲は別にまた南の島の名稱なり。
土地の風俗人情も處變ればしなかはる。その樣々を知らざるは人のひとたる甲斐もなし。
學びて得べきことなれば文字に遊そぶ童子へ
庭の訓の事始、まづ筆とりて大略をしるす所は
亞細亞洲
圓き地球のかよひ路は西の先にも西ありて、まはれば歸るもとの路、
環の端の際限なき「大平海」の西の方「亞細亞洲」の東なる
我「日本」を始とし西のかたへと乘出し國々を尋るに……——福沢諭吉著『世界國盡』より

学生社

出席者略歴

おち・はるお＝一九二九年生まる。東京大学卒業。現在、東京大学教養学部教授。著書は、『漱石私論』（角川書店）、『明治大正の劇文学』（塙書房）、『近代文学の誕生』（講談社）。

まえだ・あい＝一九三二年生まる。東京大学卒業。現在、立教大学教授。主要著書は、『幕末・維新期の文学』（法政大学出版局）、『近代読者の成立』（有精堂）、『成島柳北』（朝日新聞社）など。

ひらおか・としお＝一九三〇年生まる。東京教育大学大学院修了。現在、筑波大学教授。主要著書は、『北村透谷研究』、『日本近代文学史研究』、『明治文学史の周辺』（以上有精堂）、『日本近代文学の出発』（紀伊国屋書店）、『漱石序説』（塙書房）など。

とがわ・しんすけ＝一九三六年生まる。京都大学大学院修了。現在、京都府立大学助教授。主要著書・論文は、『二葉亭四迷論』（筑摩書房）、「『家』の構造」（『文学』昭48・7）、「文学極衰論前後」（『文学』昭51・6）など。

あさい・きよし＝一九三一年生まる。東京大学卒業。現在、お茶の水女子大学教授。主要論文は、「戯作と諷刺」（『現代文学講座・明治の文学1』昭50・2）、「仮名垣魯文論」（『国語と国文学』昭50・4）など。

あすかい・まさみち＝一九三四年生まる。京都大学卒業。現在、京都大学人文研助教授。主要著書は、『日本の近代文学』（三一書房）、『幸徳秋水』（中央公論社）、『近代文化と社会主義』（晶文社）、『日本近代の出発』（塙書房）、『坂本龍馬』（平凡社）、『鷗外その青春』（角川書店）など。

はた・ゆうぞう＝一九三四年生まる。東京大学卒業。現在、専修大学教授。主要著書・論文は、『日本近代文学大系4・二葉亭四迷集』注釈（角川書店）、「近代文学観念の成立」（至文堂『現代文学講座』）、「政治小説と坪内逍遙」（『国文学』昭51・8）など。

たけもり・てんゆう（本名　天勇）＝一九二八年生まる。早稲田大学卒業。現在、早稲田大学文学部教授。主要論文は、「『航西日記』の世界」（『国文学研究』昭42・3）、『明治二十一年の冬』（『国語と国文学』昭47・4）、「『渋江抽斎』の構造」（『文学』昭50・2）など。

司会者の諒解により検印を省略します　5211

シンポジウム日本文学12

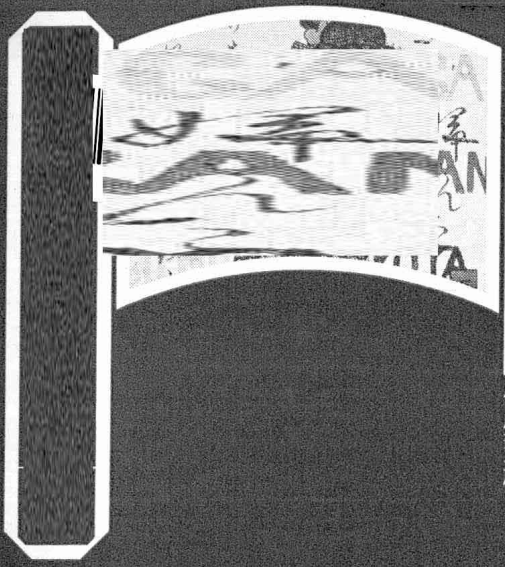
近代文学の成立期

昭和52年11月10日　初刷印刷
昭和52年11月15日　初刷発行

司会者　越智治雄
発行者　鶴岡阪巳

発行所　株式会社　學生社
東京都千代田区九段南 2-2-4（郵便番号102）
電話03(263)2611（代）振替・東京1-18870番
編集担当　堀健二郎

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan



近代文学の成立期

出席者
越智治雄（司会）
平岡敏夫　前田愛
十川信介　浅井清
飛鳥井雅道　畑有三
竹盛天雄

学生社

出席者

越智治雄〈司会〉

平岡敏夫

前田愛

十川信介

浅井清

飛鳥井雅道

畑有三

竹盛天雄

装幀

杉浦康平＋鈴木一誌

[シンポジウム]日本文学——近代文学の成立期・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　開化期の思想と文学

《報告》　浅井　清

戯作の評価軸……一三
戯作と開化期……一七
漢詩文・戯作の位相――柳北を中心に――……二三
立身出世主義と文学……二六
戯作と実録……三一
ふたたび戯作の評価軸……三六
啓蒙思想と庶民層……四三
明六社の役割……四九
時代の気流……五二
開化期の思想と文学……五五

第二章　政治小説の問題

《報告》　平岡　敏夫

政治小説への興味……六五
正史と稗史……六七
読本の継承……七一
『経国美談』の物語性……七五
『佳人之奇遇』の構想力……七八
東海散士の原体験……八〇

歴史とロマン……八三
政治小説と文学改良意識……八八
『雪中梅』の位相……九一
牢獄の文学……九六
『鬼啄啾』と状況……九九
政治小説と戯作……一〇三
政治小説と近代文学……一〇七

第三章　逍遙と二葉亭

《報告》　畑　有三

『当世書生気質』の古さと新しさ……一一七
『当世書生気質』の位置……一二五
虚構の実質……一三一
『妹と背かゞみ』へのコース……一三六
〉逍遙と政治小説……一四二
〉『小説神髄』と模写……一四四
『小説総論』の問題……一五二
『浮雲』の発想……一六〇
文三とお勢の関係……一六三
『浮雲』のモチーフ……一六八
〉『小説総論』と『浮雲』……一七二
〉逍遙と二葉亭……一七六

第四章　明治二二・三年の文学状況

《報告》　十川信介

小説観をめぐって……一八七
露伴と紅葉……一九四
小説の舞台の変化……二〇〇
文体の問題……二〇二
文体と鷗外……二〇五
『舞姫』の位置……二〇九
『舞姫』における愛……二一〇
想と実……二一八
論争の季節……二二四
明治二三年の意味……二二八

あとがき……二三七
註・解説……二三九
索　引……二四七

近代文学の成立期

第一章　開化期の思想と文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

仮名垣魯文著『那勃列翁一代記』二篇上より

第一章　開化期の思想と文学

《報告》　浅井　清

ここでいう開化期とは、明治改元後から政治小説の出現してくる明治十年代はじめころまで、といちおう限定しておく。従ってこの時期の文学の中心をなすものは、近代ヨーロッパの思想と文化を説く啓蒙文学・その具体的紹介としての翻訳文学・江戸末期から続く固有の戯作文学である。これらが近代出版・ジャーナリズムの成立を背景に登場してくるところに、開化期文学状況の特色がある。

ところでこの時期の研究は、戦前の宮武外骨・石川巌・蛯原八郎、戦前・戦後を通しての本間久雄・木村毅・柳田泉・西田長寿らの卓越した業績を基盤として、今日では、新しい視点や方法による調査・考察が飛躍的に進められている段階にある。これらの研究成果を踏まえ、討議を進める指標として、今回は戯作を軸として、次の三つの問題点を提起する。すなわち㈠戯作の評価、㈡啓蒙思想と戯作との関係、㈢いわゆる二つの文学の問題、の三点である。以下論点を整理すると次のようになる。

㈠　戯作の評価をめぐって

これは開化期の戯作における滑稽や諷刺についてこれらが江戸末期戯作の衰弱したものの結果であるかどうか、それとも近代へ転生しうるエネルギイを内包しえたのかどうか――という問題である。

ここでは第一に、成島柳北に代表される幕末知識人らの漢文戯作の評価の問題が考えられる。柳北でいえば、『柳橋新誌』、また『朝野新聞』『花月新誌』等に散見される世相諷刺の本質、その背後にある現実認識と文人意識、さらに言えば気質的な反近代性の問題である。漢文体の系列という意味では、服部撫松の『東京新繁昌記』のおもしろさの限界も、視野に収めておきたい。

第二はいわゆる戯作者の文学の問題である。たとえば仮名垣魯文では、『西洋道中膝栗毛』における西欧＝近代のイメージ、『安愚楽鍋』における現実再現力の評価など、それに『仮名読新聞』時代を含めて、魯文の戯作の内に、近代に対応しうる可能性があ

ったのかどうか。以下復古的姿勢を固守する萬亭應賀、続きもの作者としての高畠藍泉、実録物や草双紙の染崎延房らの評価。そしてこの系列の多くは小新聞と関係するが、戯作とジャーナリズムの関係やその役割を背景において考える場合もあろう。以上、戯作の二つの流れにみられる現実認識と戯作意識とを、戯作の実体を通して明らかにしたい。

㈡　啓蒙思想と戯作との関係

明六社を中心とする啓蒙思想家たちは、立場の違いは多少あるにしても、封建体制・身分制度の打破を叫び、自主自立を主張し、近代ヨーロッパの政治社会体制に範をとるべく説いている。しかし彼らの文学観は、西周らを例外として、いわゆる経世済民の文学につながるものであった。その文学観と啓蒙意識のはざまを埋める場合に、戯作的方法が援用される。たとえば福沢諭吉の『かたわ娘』の意図は、その文体と趣向とを戯作に近づけることによって、いっそう生かされている。すぐれたジャーナリストでもある福地桜痴が、文学改良論と並行して文章改良論を発表していることは、このことと必ずしも無縁ではあるまい。彼らにとって、戯作のもつ庶民性・平易性・卑俗性は、無視できなかったようである。

彼らのそれを上からの啓蒙運動とするならば、一方には心学や道話の伝統を継承する殆んど無名の有識者の手になる通俗啓蒙書がある。たとえば小川為治『開化問答』や加藤祐一『文明開化』などがそれである。彼らは西欧の文物制度などを庶民の実生活の次元で再度とらえ直し生活面の因循姑息の打破、文明開化の必要であることを、譬喩話や問答の趣向をとりながら、卑近な形で、説き明かしている、これはもちろん戯作とは言えないが、戯作的趣向が十分生かされているものである。彼らの存在によって、啓蒙思想家の活躍が、単に知的エリートの再生産に終らず、庶民層に定着していった面は見落せまい。つまり啓蒙家の思想と文学観の矛盾の突破口に、戯作の可能性があったことになるのではなかろうか。

㈢　二つの文学の問題について

これまでのまとめとして、前代より受けつがれているという文学の二つの流れ、すなわち〈上の文学＝士大夫の文学〉と〈下の文学＝町人の文学〉とが、いかなる形で接近し相互干渉をし、変貌の可能性を持っていたか、という問題である。それぞれの作品の表現内容と形式、発表型態、作者の出自、階層、教養等を総合して文学意識を考え、二つの文学の意味を検討したい。

以上、きわめて恣意的な羅列に終ったが、以て報告の責めを果したことにさせていただく。

越智　まず浅井清さんの《報告》がありますので、浅井さんからそれについて少し補足していただくことがあったらお願いします。

浅井　非常に大きな問題で、どういう観点から入ったらいいか迷いましたが、戯作を軸にして、この「開化期の思想と文学」を考えようと思いまして、㈠、戯作の評価、㈡、啓蒙思想と戯作との関係、それからこの時期の整理によく使われる、いわゆる二つの文学、〈上の文学〉と〈下の文学〉、または〈第一文芸〉と〈第二文芸〉といわれる文学のみかたを第三の問題点として、三つのトピックスを出したわけです。補うとすれば明六社関係のところが弱いのではないか、つまり啓蒙思想の最も中核的部分の扱いが不足しているようなので、お気づきの点があったらそういうところも補っていただきたいと思います。

平岡　この順序でやっていくわけですね。

越智　そうしましょう。

戯作の評価軸

平岡　戯作の評価というのは非常にむずかしくて、私もその時代のものをなかなか読めない状態です。本文そのものが私は浅井さんや前田さんのように、戯作によく通じていないのに、評価というのもおこがましいことなのですけれども、お名前をあげるのは差し控えますが、戯作について本をお書きになったり、発言をしたりされている、非常に稀有な、貴重な存在であるような方でも、戯作というものはかくのごとくつまらないものであるということを、一所懸命論じているというような感じがするのです。ですから、そういうのでは、何のために戯作をやるのかわからないということで、なぜ戯作をやるのか、戯作をなぜ論じなければならないのか、ただそこに、ものがあるから論じるということもあるでしょうけれど、やはり論じる主体との関係において、戯作が論じるに足るモチーフを喚起する何かであるのでは

『鳥追阿松海上新話』（三枚続・中）

『鳥追阿松海上新話』（三枚続・上）

ないか。私はそういう点を無理にこじつけるのではなしに、一読者として読んでも、戯作に引かれていくということがなくては、評価は始まらないだろうということがまずあります。

前田　戯作の評価の問題ですけれど、戯作がいままでおとしめられてきたのは、近代の文学史の主流を、リアリズムの観点から見る見方が支配的だったので、戯作の持っているナンセンス性というようなものが不当に低く評価されてきたのではないかと考えています。それで、近代の文学のリアリズム総体というものが疑われている現在の時点では、戯作の持っている自由なことばの使い方は、あらためて顧みられなければならないし、明治初期の文学でいえば、魯文の持っていた実を虚に変えていくナンセンス性というものを、もっと評価していいのではないか。それとこのあと話題にとりあげられると思いますが、逍遙の『三読当世書生気質』の持っている、独特の猥雑なことばの活力というようなものも、もう一度見直していいのではないか、そういうふうに考えています。

平岡　私もいまの前田さんのおっしゃったことに全く同感なのです。たてまえとして、それは正しい考え方ではないかと思うのですけれども、先ほど言ったことはたとえそうであっても、自分が戯作に引かれなければ、何ごとも始まらない

『鳥追阿松海上新話』（三枚続・下）

だろうということがあるわけです。

私はそれほど読んでいるわけではないのですが、戯作というのは、案外人生の真実をついているというか、これはたんに、ナンセンスとか、あるいは稗史的虚構――荒唐無稽ということばでいわれるのですけれど、『鳥追阿松海上新話』とか、いろいろ読みましても、そこでは、「ふとしたことから」ということばがよく使われるのです。「ふとしたことから」というのは、考えようによっては無責任な言い方ですけれど、しかし人生「ふとしたことから」が多いわけでして、今日においても「ふとしたことから」のめりこんでしまったり、「ふとしたことから」交通事故にあったりするので、不測の事態というのは非常に多いわけなのです。その「ふとしたことから」というのをあからさまに否定して、すべて合法則性のことだけが人生に起こるように考えている。これはまたリアリズムの考え方と重なるところがあると思うのです。

そこでちょっと思いついたことは、「ふとしたことから」の背景として人間の病気と欲望。病気というのは、いつかかるかわからない。戯作においては「ふとしたことから」病気になって、ころりころりと死んでいくわけです。

ぼくは『絵入人情雑誌』の「港の月」（作者未詳、『絵入人情雑誌』25～29、明14・3・19～4・7）という例をあげたことがあります。夏目漱石は『こころ』で主人公の父と母をチフスで殺したり、『それから』でも三千代の兄菅沼をそれで殺している。病気というのはそういう形でのちのち小説にまで生きているわけですけれども、人間の欲望ということに関しても、欲望（とくに官能）はやはり「ふとしたことから」発動するものだと思うのです。理性というものの制御装置といったものをそのまま信頼するという考え方は、やはり近代的な合理主義の考え方からきているのであって、今日の状況から見れば、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com